平成十年二月一日発行（毎月1日発行）　四一三号　発行／黒埼町役場　〒九五〇-二一九六　新潟県西蒲原郡黒埼町大野二八四三-一　電話／〇二五-三七七-二一〇一　編集／企画商工課（担当・広報統計係）　印刷／小野塚印刷㈱　経費一部六十五円

黒埼町の今昔

第190回　執筆　宮田栄門

新聞からたどる黒埼の歴史（六十一）

双葉山、羽黒山から大相撲大野巡業まで

第二回大相撲大野興業を後に、力道山は引退をした。

（先月号からの続き）

相撲興業も雨が降って日延べになったという話もあり、これは、新町の山田工さんの話であるが、その雨あがりか、工さんが相撲場の所へ見に行ったら、大勢のお相撲さんが一生懸命に、テントに溜まった雨水を木の棒などで差し上げて落としていた。するとその時、大きな相撲とりが、何も持たずに自分の手でテントを押し上げて雨水を落としていたが、それがあの不動岩という人だった。

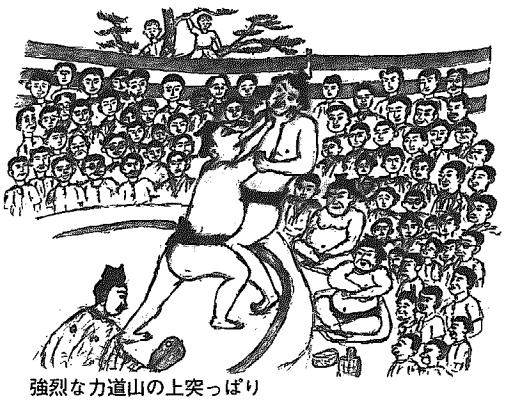
新潟屋に泊まった大関佐賀ノ花が、小さな座敷犬を連れてきた。現代ではペットとして小型犬を部屋で飼う家が多くなったが、当時大野で、部屋に犬を飼っている家は一軒もなかった。佐賀ノ花の犬がまた行儀の良い犬だったらよかったのだが、新潟屋の座敷に所かまわずおしっこをして、苦情のやり場がなく困ったそうである。

二回目の大相撲大野興業の年については、決め手がなく、力道山の相撲記録をもとに二十五年としました。これについて、異論もあると思いますが、外にこのことを記録したものは何もなく、それにしても、なんとかこの記事をまとめたいと思い、この記事を書きました。

※注　正確な記録をお持ちの方がありましたら、教えていただければありがたく思います。また、大野栄町の坂井国作さんから大野へ来た相撲とりのことについて、お知らせをいただきありがとうございました。参考とさせていただきます。

続、力道山の紹介

力士の象徴ともいえる髷を、台所の包丁で切り落として一人淋しく引退した力道山。そんな事情を全く知らなかったし、あの力道山が日本人でなく、朝鮮の人だったということも遅耳といわれるかも知らないがこの記事の取材中に初めて筆者は知った。日本相撲協会の古く厳しかった規則も戦後次第に改正され、それまで外国人は一切受け付けなかった大相撲の力士が、世界各国から誰でもなれるようになり、そして遂に外国人の横綱曙も誕生。大関から陥落したが絶大なる人気を持ち続けながら平成九年十一月大相撲を引退した小錦。実力派大関の武蔵丸。それはともにハワイ出身の人たちである。しぶとい足技で観客を魅了している旭鷲山はモンゴルの人で、外にも多くの外国人力士が兄弟子にしごかれながら、もくもくと相撲のけい古にはげんでおり、大相撲の門戸は今世界に開かれている。翻って、力道山が力士として活躍していた戦時中の日本相撲協会の実情はどうだったのか。当時日本は軍国主義に徹し、伝統ある相撲は国技として尊重され、外国人の入門には固く門戸を鎖しており、協会規則も今とは比べものにならない封建的なものだったようである。そんな時代に力道山は朝鮮国から来た。来たといっても無理矢理連れてこられたのだった。偽の国籍、戸籍まで作り、今ではとても考えられない巧妙な偽装工作によって一人の日本人として来日させられたのだという。



強烈な力道山の上突っぱり

力道山は、金信洛といって一九二〇年（大正九年）朝鮮咸鏡南道洪原郡龍源面新豊里（現新浦市龍中里）に生まれた。子どもの時から体格の良い信洛は十七才のころ朝鮮相撲の強豪力士になっていた。一九三八年（昭和十三年）端午の節句の五月、朝鮮半島咸鏡道の松林で東海岸地区の名力士を集めて朝鮮相撲大会が開かれ、金信洛は三位になった。彼の相撲ぶりに目をつけた、日本の長崎県大村の百田巳之吉（大相撲玉の海後援会の幹事）が、嫌がる信洛を無理矢理に日本へ連れてきて、大相撲の力士にしようとした。当時、古いしきたりの相撲協会は外国人は力士として認めなかったため、百田は信洛を自分の三男百田光浩に戸籍を偽造し、日本人ということにした。しかし信洛は自分は日本人ではない朝鮮人だと、その誇りを捨てず、日本人名にはあくまでも反対したが玉の海は、皇国臣民にしてもらったんだぞ、ありがたく思わにゃいかん。恩を仇に返すようなことを言うんじゃないと叱ったという。当時、二所の関部屋は八十名もの大世帯だったというが土俵は一つしかなく、入門したばかりの者やしたの者は夜中に起きて朝の八時までけい古した。兄弟子たちは力道山をいろんな技で土俵に叩きつけた。彼は傷だらけになっても「まいった」と言わず、兄弟子に立ち向かった。後で兄弟子たちが「けい古の鬼だ、力道山のけい古は狂人のようで、けい古をつけるのがこわかった」と話していたという。新弟子時代の力道山は他の新弟子たちと同じように関取の付き人を務めた。付き人、それはいってみれば小間使いだった。兄弟子の外出時には必ずおともをし、チャンコの時は世話をし、関取連中が食事を終えた後にもう実のなくなったチャンコの汁をぶっかけて飯をかきこむ、ぐずぐずしていると「何時まで食べているんだ」とどやされる。風呂に入る時には石鹸、手拭いを持って後につづき背中や手足をこくる。寝る時はいち早く布団を敷き、トイレに行く時はドアの外で立っていなければならなかった。太った力士の場合手が後ろにとどかないので用をたした後は拭いてあげねばならない。それはつらい毎日だった。力道山は歯をくいしばって付き人を一生懸命に努めた。強くなって一日も早く関取となり故郷に帰る日のために、眠る間もおしんでの猛けい古によって、力道山の上突っぱりと張り手は威力をまし、とくに張り手は力道山の必殺技となった。

（続く）